大丈夫よ！お母さん！

vol.27

教育コーディネーター　中西美沙子

（今回のテーマ）

心の贈り物

「自然」という「恵み」を感じることが薄くなっていると思うのは、私だけでしょうか。春の風が柔らかく吹くと、心が軽やかになります。「生かされてあること」の贈り物を感じるからでしょう。

何年か前、とても驚かされたことがありました。小学生の「夢」についてのアンケートです。将来なりたいもののトップは、「正社員」。時代の影響が子どもの夢にまで染まっている、と感じました。

子どもは外からやってくるものに対して無防備です。ノロやインフルエンザに対する予防は、心がければ誰にでもできますが、「心の予防」は、少し難しいことかも知れません。

現代の情報は、「経済」にかかわることがとても多いですね。景気、デフレ、株、円高。経済に無関心でいられない状況が、私たちを取り巻いています。「備え」は必要なことですが、焦燥感にかられ「投資」「保険」などの「安心」を過剰に求めるのは、どうでしょう。そこだけに焦点が当たるのは、危うい感がするのです。それは親の経済に対する考えが、無意識に子どもたちに映るからです。

生活のために、家族は何をするか？未来を見渡す視野は尊いものですが、「未来」とは「現在」からつながるもの。「今、という時」を、まず大切にしたいものです。子どもとともに過ごす時間を。子どもはあっという間に成長します。親子のきずなを結ぶ土台は、家族が共有する時間の濃さではないのでしょうか。

半年ほど前、私は父を亡くしました。突然に。失って、初めて気づいたことがあります。父が亡くなって1月ほどたった頃、キッチンでぼんやり外を眺めていたら、お豆腐屋さんのラッパの音が聞こえました。すると前の道を、父がオートバイに乗って通り過ぎたのです。ヘルメットをかぶって。まっすぐ背を伸ばして。幻だったのでしょうか。それとも似た人が通ったのか。その時思いました。大事なことは何も伝え合わずに、父も母も逝ってしまった。長く一緒に暮らしたのに、と。でも一方で、これで良いのだ、と肯定する自分もありました。「何気なく過ごした時間」が、実は「かけがえのない時間」であったからです。

不安な時代にあって、人を常に支えるものは、そんなところにあるのでしょう。

子どもは時代を映す鏡です。そして子どもには、あらゆる可能性をひめた力があります。その可能性を見つけるのは、大人たち。子どもの良いところを見つけ励ますことで、「生きること」を子どもたちは学んでいきます。

マルセル・モースという人類学者がいました。彼の「贈与論」は、現代人の経済のあり方に一石を投じました。ポリネシアの人たちが、見返りを求めずに大切な物を他の部族に贈る風習を彼は発見しました。モースの考えを土台にして現代人の生き方を模索している人たちが、たくさんいます。経済中心の生活では、人間は行き詰まると考えるからです。

私の教室には、大人のための「サロン」のようなクラスがあります。授業の後、コーヒーをお供に、輪になってテーブルを囲みます。互いの思いを「語ったり」「聞いたり」、ごく自然で、あたたかな時間が流れます。私はそこに「心の贈与」を感じてなりません。経済が本当に人を活かすとしたら、「心の贈与」があってこそ、と思えるのです。

薄紫のヒヤシンスがほころび、草の香りがします。その余りにも鮮やかな自然の営みに触れると、「心の贈与」が、いかに大切か、改めて実感されるのです。

Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

静岡大学客員教授。文章教室「スコーレ」画廊「キューブブルー」などを主宰。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

問 tel 053-456-3770

中西美沙子　検索

ピアニシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアニシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）

※お求めは浜松市内の谷島屋で。